
ウレハ

いみたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウレハ

【Nコード】

N7681Z

【作者名】

いみたん

【あらすじ】

クリスマス夜の夜、真紀は逃げるように地元へと帰郷する。母校の回りを歩いていると、女子中学生にライブのチケットを押し売りされ、しぶしぶと公民館へと入った。

羽柴良太は、親友であるひきこもりな橋本恭介を連れ出すべく、荒療治としてライブへと出かけた。

隆は松尾淳一の紹介でバンドのヘルプを頼まれヴォーカルとしてス

ステージに立った。

ベースの男は遅れている、バンドのヴォーカルが到着するまでの間、時間稼ぎに流行曲をのコピーをしようと隆にもちかけるが、隆はこれに断固として反対した。

そのとき、会場に居合わせた、真紀を指差し、

「あんたにこの曲を捧げる、メリークリスマス！」
と、言った。

隆のこの行いにベースの男は更に怒りをつのらせ、襟首をつかんだ。騒然とする中、このバンドのメンバーである、山中椿は、場の空気を収めるために、ギターをかき鳴らした。

頃合いを見て、隆は歌い出した。

歌唱力の高い隆の歌声に場内は唖然とする。

居合わせた者は隆にだれも文句を言えなくなった。

隆が会場から出て、バイクのエンジンをかけていると、隆の後を追ってきた真紀が話しかける。

オリジナルだという先ほどの、即興に驚く真紀だった。

二人は意気投合し、逃げるように会場を去った。

『第一部』プロローグ（前書き）

この物語は、当初同人ベルゲームで、商用を考えておりましたが、諸事情により、制作を断念いたしました。

イラスト（立ち絵）、物語が半ば出来上がった状態です。

多くの人に楽しんで頂くために、今回公開に踏み切りました。

イラスト（立ち絵）一枚絵などは、アメブロの方で展開していくつもりですので、この作品『ウレハ』をより楽しみたい方はそちらに目を通してください。

<http://ameblo.jp/imitant2/>

『第一部』プロローグ

恋人たちが肩を寄せ合い、色とりどりのネオンが街を包む。

だれもが寂しさとは、無縁でありたいと願う今宵焦燥感を隠した女は、電車に揺られ、都会から田舎へと帰郷していた。

時折ため息をつき、窓辺から流れる景色をぼんやりと眺めて、車内に漂う温かい雰囲気押し払うように沈黙している。

数少ない乗客たち、家族連れや、学生カップルは皆幸せそうな顔をし談笑していた。

その中でぼつりと、取り残されたように女は座っていた。

化粧や服装がパツとしすぎ、右手には山、左手には海と、囲まれているこの田舎では、余りにも不釣り合いに見えた。

全体的には小作りな顔立ちをして、さっぱりとした印象だが、端正な顔立ちである。

「SAYAの新曲聴いた？」

「あれてクリスマスソングだよな」

学生カップルは談笑している。それを見て女は、疎ましそうに顔をゆがめた。

電車がゆっくり駅に止まると女は立ち上がった。

構内は巨人が押しつぶしたように低く、一般的な広さからすれば大分狭かった。

駅には人がまばらだった。

改札を通り、女は外に出ると、

「珍しい。この時期、この町に雪が降り積もるなんて……何があったの？ あ　私が帰ってきたからだ」

と自嘲した。

辺りを見て、目の前にあった空席表示のタクシーに乗り込んだ。

「城西中学校までお願いします」

運転手に声をかけ女は深く腰を据えた。

少年は、扉の入り口に立ち、何かを引っ張っている。

「恭ちゃんてば！ もうライブ始まつてるから、今から行っても、クラスの人にはそんなに会わないよ」

と言つて、さらに細腕に力を込めた。

その小柄な少年は、厚ぼったい前髪で目元は隠れ、頬はそばかすで覆われていた。

「やだよ、良太君、俺」

と言つた声の主は扉の中にいて、ここから先には出まいと、冊子に手をかけている。

中にいる少年の方は体格もふつくらしており、身長もかなり高いので、小柄な少年の努力は、焼け石に水といった具合である。

「良太君の家に行くつて言つたから出てきたのに、俺だまされるところだった」

「だからこうして、打ち明けてるんでしょ」

小柄な少年はそれでも、負けじと引っ張っている。

「とにかく、俺いかない」

「山中さんが参加してるつて言つても？」

体格の良い少年は力を緩めた。その瞬間、小柄な少年の腕はすべて、鉢植えを倒しながら転んだ。背中にある手すりから下を覗いて、

「いったあ」

「ごめん……」

「あぶないよ！ これでもう、行くしかなかったね」

扉の下はおよそ、十メートルの高さがあり、落ちると笑い事ではすまない。

体格の良い少年が小柄な少年に手を貸す。

「大丈夫だよ、僕が保証する。チケットもほら！」

そう言つて、微笑すると、体格の良い少年はあいづちを打った。

壊れかけの街灯が点滅し、夜の校舎をぼんやりと照らしている。グラウンドの端にはテニスコートがあって、ネットが張られていた。

女は体を抱くようにして、歩いている。

「懐かしいな、でもむなし……」

辺りを見渡すと、道路を挟んで、テニスコートから反対の方向にある公民館から明かりがもれていた。

「こんな建物あったかな？」

と、女は言って歩き出した。

すると入り口からサンタクロースの姿の少女が出てきて、踊り場から階下を、首を左右に振って覗いている。

そこで、女を見つけると、

「あの　あの！　その人、ここでライブしてるんですけど、見に来ませんか？」

女は訝しそくに、階段上の踊り場を見つめて、

「その人って私だよな？」

と、言って、女はその場所まで歩み寄る。

「そうですよ、今なら特別にただで！」

と言って、サンタクロースの格好をした、少女は笑った。

「ちょっと待ってちょっと待って、うーん、ライブ……ライブか」
女が悩んでいると、

「あの、失礼ですけどどこかで、会ったことありませんか？」

と少女は言った。

「うまいなあ。久しぶりに、こっちに帰ってきたから、それはないかな」

「わー、どつりでカッコイイ」

「まあ暇だし、いいか……高校生？」

「チュウニです。わーい、それじゃ、中に入ってきてください」

「若いねえ」

と言って女は階段を上る。中からは何やら騒がしい音が聞こえ、

それが怒鳴り声だとわかると女は、後悔したのだった。

「所詮こんなものか」

少年はそう小声で毒づいて、ステージを見下ろした。公民館の中は学生でこった返していた。

「えーと何だっけ隆くんだけ？　ちよっとライブ中にみんなごめんな」

ベースを抱えた男は、観客に一度謝り、少年の肩に手を回した。男の金髪の頭頂部は黒く、不健康な顔立ちだった。

少年は嫌悪感を隠すこともなく、中性的な顔立ちをゆがめた。

「次の曲それで行くから」

そう言っただけの男は、楽譜をスタンドに置いた。

「俺、この曲知りませんし、楽譜読めません」

少年は一通り目を通して言っただけから、ベースの男から視線を外して観客席を見つめ、

「松尾！　これっきりだ！」

と、続けた。

「そんなこと言わずにさ　、学生でこの曲知らない人いないよ。後半、オリジナルの曲持ってくるんだけど、時間余りそうさ」

ベースの男は、マイクを避けるように小声で言った。

「だから知らないから、歌えませんか……」

少年はそう言っただけで、意味のないやりとりで嫌気がさしたのか、ステージの右端にぼつねんと立つ、ギターを抱えた少女の方を向いた。

「ねえ、隆君だったよね、聞いてる？」

「松尾君にヘルプ頼んで、君に来てもらったのに使えないよね……」

少年はギターを持つ少女を、睨みつけるように見つめ、少女もそれに答えて驚いたように睨み返してくる。

少女はボブカットに、エースのトランプ柄のティシャツを着込み、チエックのミニスカートに、色落ちしている先がとがった革のブーツを履いている。愛くるしい童顔な顔つきで尻はつり上がり、身

長は相当低かった。

始まらないライブに、次第に観客たちの話し声が大きくなる。

「わからなくてもいいからさ、適当に合わせてよ。開始早々これじや遅れてくるヴォーカルに、申し訳ないでしょ」

少年はベースの男を見上げた。

「適当に歌え？」

少年はそう言って、目の前にあった楽譜スタンドを、勢いよくはねのけた。

「ふざけんなよ！ こっちは、やりたくもねえのに、松尾だから頼まれてやってる。はあ？ はやりの歌のコピーやるくらいなら、バンドなんか組むんじゃねえ、義理で二千元も払えるか！ 五百円の価値もねえ！」

観客席、最前列に立っていた、面長の少年が額に手を置いた。

ベースの男は数秒惚けたしていたが、すぐに険しい顔つきに変わり、少年の襟首をつかんだ。

「テメエ、なにさまのつもりだよ！ ただのすけつとだろ！」

ベースの男はそう怒鳴った。

「それはこっちの台詞だよ。おまえがなにさまかってんだよ！」

二人は押し合い、床にあったコード類が散らばった。

ドラムの神経質そうな男は、ドラムスローンからやっと立ち上がり、喧嘩の仲裁に入った。

「ガキがバンドを知らないくせに」

「おいみんな！ 特にこの男目当てで来てる女子帰れ！ ガキと高校生に言ってるぞアリエネエ！」

少年はベースの男に殴られステージの端に追いやられる。

そのとき、黒山の人だかりを避けるようにして、ライブなんて眼中にないというように、顔をステージから背けて立つ女に目がまつた。

(こいつも俺と同じか……こうなったら何もかも壊れてしまえ)

少年はマイクを引つつかみ、

「そのギンガムチエツクの人！」

公民館の隅にいるその女を指さして、
女は（？）自らを指さした。

「そう、あなた、センスというか雰囲気がいい。あなたにこの曲を
ささげるぜ！ メリークリスマス！」

と、少年は言った。

会場からはブーイングの荒らしが起きた。

「おまえもう帰れよ、クソガキが！」
と、ベースの男は肉薄した。

ライブは手がつけれられないような、状態になった。

するとそのとき、ステージのスピーカーから、大音量でギターの
音が刺すように走り抜けた。

ギターを抱えた少女は目を閉じ、弦を、叩くようにはじいている。
始めはただの爆音で、馬のいななくような音が、次第に整ってき
た。

少女は高速で指を操る。

観客は吸い込まれるように、彼女を注目した。

徐々に演奏はフェードアウトし、マイクを持つ少年は、ギターを
ひいている少女へ、視線で合図を送ると、マイクを抱え込むように
持った。

ベースの男は釈然としない様子だったが、これを期に自分の位置
に戻っていった。

少年はまるで何かに魅入られたように、頭を揺らし歌い出した。

ギターはコードを変調させ、少年の歌声と重なり合った。
ドラムとベースも、たどたどしくはあるが、ついてくる。

それらは一体となって、少年の力強くて芯が通った歌声に、導か
れていった。

いつのまにか、観客は静まり返り聴き入っていた。

少年は掌を上にして水平に腕を上げ、半拍置いてそれを下げた。

その合図をきっかけに音が収束する。

少年はゆつくりと目を開けた、両目は涙で濡れていた。

無言でマイクを置いて、ステージを降りて歩き出す。

パチパチと拍手が起き、一気に爆発した。

少年が扉の取っ手に手をかけたとき、

「ちよつと隆君!？」

と、ベース男の声が場内に響いたが少年は、無視をし扉を開けた。モッズコートのポケットに手を突っ込んで、階段を下りる。

ステージのちよつと真下に、駐輪場があつて、そこにバイクはあつた。

少年は、駐輪場に止めてあるバイクに、腰を掛けハンドルロックを外した。

流線型のボディ、戦闘機のようなスタイルでウインカーはついていない。スクーターのような形をしているが、ナンバーからして原付きではないことは伺えた。

キックペダルを踏み込む。それを数回繰り返すがエンジンはかからない。

「おい、がんばれよ!」

少年はバイクに向かって言った。

「かわいいバイク」

少年が振り返ると、ギンガムチェックの服を着た女がそこにはいた。

「あ、さっきの女」

少年はそう言つて、バイクのエンジンをかけるのをあきらめ、シートに腰をかけ女と向き合った。

「歌うまいよね。題名聞かせて!」

「題名つて言つてもな……さっきできた曲だし……勝手につけていいよ」

「え? 即興で全部やったの? ウソだ! ギターの子とすごいコラボしてたし」

「ギターね、あれは特別。でも、さっき浮かんだメロディだし、そ

う、あんた見て作ったから、何かのイメージにはなってるかもな」
女は少年の肩をつかむと揺さぶった。

「お願いだから違うって言って、実は邦題があったりするんでしょ
う？」

「アリエネエこの人しつこいよ、何、何、これってナンパ？」

と、少年は笑いながら言った。

「声をかけたのはそっちが先！」

それから、女は妙に真剣な表情をして手を離した。

「俺は隆そっちは？」

「わたしは真紀」

「二人ともありふれた名前だな」

少年はシートから腰を上げると、全体重をかけるようにキックペ
ダルを踏んだ。

白煙がマフラーから出て、パンパンと音が響く。

そのとき、階段の下に数人が現れた。中でも、サンタクロース姿
の少女は腕を組んで、バイクにまたがる少年を見つめている。

少年は慌ててジョッキーマヘルメットを被ると、

「ヘルメット貸して！」

女も慌ててそう言った。

モッズコートの方スナーを上げると、少年はバイクを走らせた。
鉄骨で覆われた低い天井に、ハチの羽音のようなマフラー音が響
いた。

アスファルトを滑るように進む。

雪が二人の肌を叩いた。

先頭に立つ面長の少年は、バイクにまたがる二人を見て、額に手
を置いた。

サンタクロースの姿の少女は、険しい目つきで睨んでいる。

少年はニヤリと笑ってアクセルを回した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7681z/>

ウレハ

2011年12月25日01時51分発行